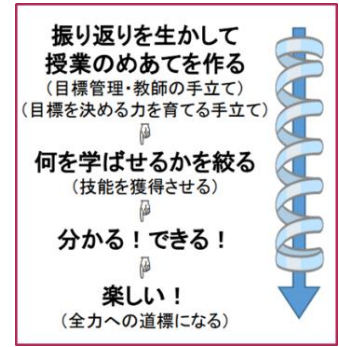


令和2年～3年度 新潟県・新潟市小学校教育研究会指定研究（2年次）
 体育科授業研究会 活動記録

1 基本情報

- (1) 研究主題：子どもがめあてに向かって意欲的に取り組む体育学習
 ～全力で取り組める目標のめあての工夫～
- (2) 教 科：体育科
- (3) 期 日：令和3年11月19日(金)
- (4) 会 場：佐渡市立真野小学校 *オンライン開催



【めあてに向かうイメージ図】

2 研究の概要

子どもの実態から“子どもは体育科の学習で、何を学んでいるのかが分からないまま学習活動が進んでいるのではない。また、自らの成長を意識したり、新しい課題を考えたりすることができていないのではない”と教職員で話し合った。そこで、目指す子どもの姿を設定し、それを実現するための手立てを構想して授業研究に取り組んだ。その姿を実現するための手立ては、子どもの振り返りを生かした授業でのめあての設定と子どもの“全力”を引き出す焦点化の2点とした。

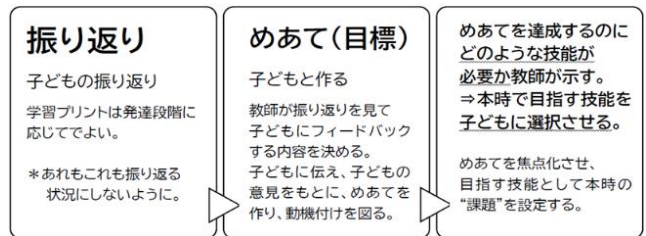
1年次の研究では、ボール運動領域について研修を深めてきた。しかし、取り組んできた様々な実践の中には、子どもはとても楽しそうにやっていて、意欲があるように見えるけれど、実はよく見ると一部の運動の得意な子だけが活動したり、活躍したりしている授業があった。

当校で目指す子どもの姿は、ワクワクして運動する姿、運動が苦手な子でも夢中で活動する姿、やってみようとやる気になって運動する姿である。そこで2年次は、目指す子どもの姿を追い求めるために、子どもの運動能力の差や技能の差にとらわれずに子どもの全力の姿を見取ることができる「体づくり運動」に焦点化し、授業研究に取り組んできた。

3 授業の概要

(1) 3年体育科授業について

- ① 授業者：渡辺 萌子
- ② 単元名：「体うごかし名人になろう」
- ③ 概 要：



【振り返りの授業への生かし方イメージ図】

バランスボールを用いて、「体の動かし方を工夫すること」「友達の良い動きを見つけ、自分の動きに取り入れること」を目指して学習活動を行った。

まず、授業の始めに多様な動きを示した「チャレンジカード」を提示し、子どもに獲得させたい動きや学習する上でモデルとなる動きを示した。カードには、動きができたときの気持ち（心地よさ）が表れるよう工夫し、身体的な面と心理的な面を意識できるようにした。授業では、前時の振り返りを生かして、子どもとともにめあての設定を行い、「ペアで手を使わず、落とさずボールを運ぼう」というめあてになった。また、めあてを達成するための動きのポイントを教師が提示し、子どもが活動する際の動きの焦点化を図った。

子どもは、めあてを意識し、友達と関わりながら運動を行った。教師が示したポイントを生かして、多様な運び方を考える子どもも多く、笑顔で楽しそうに学習していた。ボールをはさむ位置と場所を意識した運び方を考え、共有の場面では抽出したペアが全体に伝えることができた。共有後のチャレンジタイムでは、紹介された動きに挑戦したり、自分たちが考えた運び方に名前を付けたしたりと、意欲的に取り組む姿が見られた。



課題として、想像以上に多様な運び方が生まれ、動きの幅が拡散したことが挙げられた。この場合、教師の意図をもって動きの種類を制御することが必要であった。子どもたちの動きが学習のねらいに近づくように支援し、次の動きに発展させられるようにすることが大切である。

(2) 6年体育科授業について

① 授業者：鈴木 亮輔

② 単元名：「体力UP大作戦～見つける力・考える力～」

③ 概要：

「動きの高まりを感じることで、工夫やポイントを考えること」

「良い動きを見つけ、自分の動きに取り入れること」「認め合いながら、楽しく体を動かすこと」を目指して学習活動を行った。そして、教師による「体の動きが高まる」という言葉の定義づけ・振り返りを活用した子どもの活動の価値付け・子どもの気づきの蓄積の3点を重視して実践を行った。

研究授業は全6時のうちの6時間目であった。授業の始めに前時までの振り返りを生かして、「運動の工夫を考えて、体の動きを高めよう」というめあてが設定された。その後、蓄積してきたキーワード(子どもの気づき)を提示し、グループ活動での視点を示した。

子どもはグループで新しい運動を生み出し、自らの動きを高めようと、試行錯誤して運動を考えていた。難しい運動に取り組んだグループは、挑戦してできないと判断すると、対話しながら難易度を下げてできることを考え、運動の工夫を見つけていた。グループの中には、「どうやったら体の動きが高まるかな?」と相談しながら、運動に取り組む姿も見られた。

考えた工夫を共有する場面では、教師が「その運動で何が高まった?」と子どもに問いかけることで、めあてに対する子どもの意識を焦点化していった。

自由に運動に取り組む場面では、子どもは自分のやりたい運動を選び、楽しそうに活動していた。また、友達と声をかけ合い、何度もできるまで挑戦する姿も見られた。

活動後の振り返りには、自分で運動のコツを考えたり、友達の動きを見て運動のコツに気付いたりする様子が書かれ、動きの高まりを自覚する児童が多かった。



4 研究の成果

指導者の佐渡市教育委員会 指導主事 小田俊裕様からは次の3点をご指導いただいた。

- ・体力向上・日常生活(生涯スポーツライフ)につながる生活における運動の必要性を考慮すること。
- ・「問い」をもち、「対話」を通して考える子どもを体育科の学習の中でも育てることが大切であること。
- ・真野小学校の研究は、指導要領で示される授業改善の取組そのものであり、良いということ。

また、指導者の新潟医療福祉大学 教授 脇野哲郎様からは、次の3点をご指導いただいた。

- ・めあての質と子どもの全力の姿は強いつながりがあり、めあて(課題)の設定に加えて見通しが大切になること。
- ・子どもがねらいを外さなかった。教師がねらいを明確にすることで授業がブレなくなる。
- ・子どもの姿(振り返り)の評価は、適度に厳しく行い、次時の目標設定の観点に生かしていくこと。

2年次研究の課題であった、子どもがめあてに向かって意欲的に取り組む姿について、価値を見出すことができた。今後は、授業の達成度を的確に評価するために、児童の振り返りの記述を教師がどのように評価すべきかを検討する必要があると考えている。

5 その他

研究の詳細(研究発表会の要項、授業実践の指導案等)は、新潟県教育支援システム(Tea Room)にて公開。